

留学生との交流が日本人学生に与える影響

—交流グループに所属する日本人学生の事例分析—

藤井 桂子

【キーワード】 PAC分析、国際交流サークル、留学生との交流・支援、日本人学生、異文化理解

1. はじめに

留学生受け入れ30万人計画が動き始め、大学にもより多くの留学生の受け入れが求められるようになった。学内での留学生と日本人学生との活発な交流も一層期待されている。留学生と日本人学生との交流の重要性、必要性に関しては、留学生の異文化適応の観点からの研究（田中（2000）他）に続いて、日本人学生の側に視点をおき、留学生と交流を持つ日本人学生を対象とした研究がなされてきた（田中1995a、田中1995b、瀬口・田中1999、山崎2002、花見2006、岩井2007）。これらの研究から留学生との交流が日本人学生に対して教育的な効果を持つことが明らかにされてきているが、研究対象としてチューター活動に携わる日本人学生を扱ったものが多く、国際交流グループで活動する日本人学生を対象とした研究は花見（2006）があるもののあまり多くは見られない。また、アンケートや聞き取り調査により全般的な傾向は把握されているが、留学生との交流によって個々の学生の中で何が起こり、学生の内面にどんな変化がもたらされるかについての詳細は十分解明されているとは言えない。

本稿では、国際交流グループで活動を初めて1年目の日本人学生2名の事例をとりあげる。彼らはそれぞれが何らかの理由で、自ら留学生との関わりを望み、活動に日常的に携わるようになった学生達である。個人としての留学生との関わりもあれば、グループとしての関わり方もある。相手となる留学生達も多様である。またメンバー同士の関わりもある。そうした中で個々の学生が、留学生との関係や活動をどのように受け止めているか、どのような影響を受けているのか見ていくことは、交流の意味を考える上でも必要なことと思われる。1年目の学生を取り上げるのは、彼らのはじめ

に抱いていた交流への期待と、実際の活動の中で受け止めているものとの違いや、活動を継続させる要因などが見出しやすく、また、今後の変化を縦断的に見ていく上でも、活動初期の学生を対象とした調査がまず必要であると考えたためである。

調査は、PAC分析を用いて行なった。次節で述べるように、PAC分析は個を対象とした研究法で、量的な研究技法と質的な研究技法を合わせ持ち、個の内面に深く迫る分析法としての特徴を持つ。横田・白土（2004）は、日本における留学生交流の研究の中で、その現象がなぜ、どのように起こるのかという「現象のメカニズムを解明する」研究が不足しており（注1）、メカニズム解明のためには、定量的なデータによる一般的な現状の把握や、その現状に対処するための当面の対策ということだけでなく、特定の個人を対象とした定性的なデータによる研究の蓄積が必要であると指摘している。また、方法論の上でも多角的なアプローチが必要とされている（横田1996）。よりよい交流のあり方を探るためにも、個人に焦点を当てた種々の手法を用いた質的研究を増やしていくことが求められていると言える。調査で得られた知見は、交流活動に携わる学生達への助言をする上でも役立てていけるものとする。

2. 調査の概要

2.1 PAC分析について

本調査で用いたPAC分析（Personal Attitude Construct）は、内藤哲雄が開発した技法で「当該テーマに対する自由連想（アクセス）、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスターの分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」（内藤2004）である。

量的研究と質的研究の手法を合わせた技法であり、統計的な手法により外在化、客体化されたクラスター構造をもとに、被調査者とともにイメージや解釈を探索していく。したがって、通常の聞き取り調査より客観性が高く、また被調査者自身が意識しない内面深くにある関係構造を探ることができる点でも優れている。また、調査者が設問等であらかじめ枠組みを用意したアンケートやインタビューと異なり、個人の自由な発想に基づい

て析出されたもの、すなわち個人の枠組みに基づき、イメージの全体構造や意味を明らかにしていく点にも特徴がある。個を対象とした研究であるが、内藤（2004）は、「メカニズムに注目するならば、個においても他者と共通する普遍性が存在する可能性があり、特定個人を詳細に分析することは、個別的な普遍性だけでなく、共通的普遍性の解明をも目指すことになる。」と述べている。

2. 2 調査対象者・調査時期

国際交流グループに所属する活動日本人学生2名JA、JBに対して調査を行なった。調査時期は20XY年から20PQ年である。各調査時において、JAはグループの活動を開始してから約3ヶ月、JBは約6ヶ月が経過していた（注2）。JA、JBとも海外在住の経験はなく、留学生との接触はグループ活動に携わって以降である。

2. 3 調査手順

内藤（2004）に従い次の手順で調査を行った。調査に先立って、調査内容は個人が特定されない形で研究に使用することを説明し、調査への協力の了解を得た。

1. 連想刺激を印刷した紙を被調査者に提示し、口頭で読み上げ、自由に連想したイメージや言葉をカードに記入してもらう。連想刺激は次のとおりである。『「留学生との交流」「留学生へのサポート」と聞いたとき、あなたはどんなイメージが浮かびますか。またこれらは、あなたの考え方（現在および将来）に、どのような影響を与えているあるいは与えると思いますか。思い浮かんできた言葉やイメージを思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。』
2. 書き終えたカードを重要だと思われる順に並び替え、番号をつけてもらう。
3. 次の文面と評定尺度を記した紙を提示し、口頭で読み上げたのち、各項目間の類似度の評定を行う。「あなたが留学生との交流や留学生へのサポートについてカードに書いたイメージや言葉の組み合わせが、ことばの意味でなく、直感的イメージの上でどの程度似ているかを判

断し、その近さの程度を該当する数字で答えてください。」評定尺度は次の通りである。非常に近い1、かなり近い2、いくぶん近い3、どちらとも言えない4、いくぶん遠い5、かなり遠い6、非常に遠い7。

4. 被調査者の評定を統計ソフト「HALWIN version 6.24」に入力し、ウォード法によりクラスター分析を行う。
5. 析出されたテンドログラムを印刷し、余白部分にカードに書かれた項目を記入する。記入し終えたテンドログラムを調査者と被調査者が一枚ずつ持ち、各クラスターのイメージや、項目がまとまった理由を被調査者から聞く。次にクラスター間の比較を聞き、補足質問があれば行う。調査者と被調査者のやりとりは、紙に記録するとともに被調査者の許可を得て録音を行う。
6. 各項目の単独のイメージをプラス、マイナス、ゼロ（どちらとも言えない）でカードに記入してもらう。

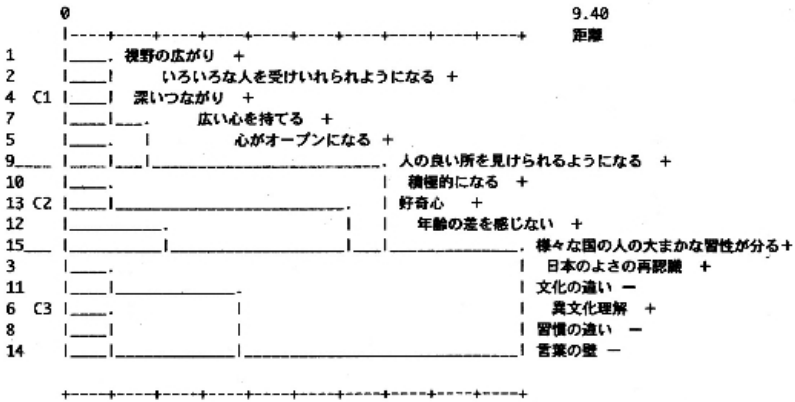
3. 結果

3.1 JAによる解釈

図1はJAのテンドログラムである。テンドログラム左端の数字は各項目の重要度の順位を示している。各項目の右端の記号（+、-、0）は、単独のイメージを示す。図におけるC1、C2、C3は、各クラスターの範囲を示す。析出されるクラスターの項目が統計ソフトによって異なる場合がある。参考資料として各項目間の類似度評定の結果を記した表を本稿の最後に記載した。

テンドログラムについての被調査者による解釈は以下のとおりである（注3）。（ ）内は、調査者の質問内容を簡略して示したもの、あるいは補足である。

図1 JAのテンドログラム



クラスター1「視野の広がり」から「人の良い所が見つけれられるようになる」までの6項目

(クラスター1をまとめて見たとき浮かぶイメージは) 自分の世界観が広がる。広い心を持てる。(色でいうと) (注4) 黄色。明るい。(感触は) 風船みたいなおおらかな、ふわふわした感じ・・・いい感じ。壁がない。素直。(どんな内容で、どんな理由でまとまっているかという) 人とのつきあい。自分の考え方の変化。国際交流する前は、日本人と触れ合うだけで日本の文化しかわからなかったけど、せまい感じから広く、色々な人もいるんだなっていう方向に変わった。留学生とは、その人の年齢とか肩書きとかなしにその人そのものに向き合える。日本人同士だと色々な年を気にしたりするが、留学生だとそういうことがない。日本人だと一回話しただけではそこまで仲良しになれない。留学生だと1回話ただけで、それからも仲良くなれる。お互い、ためらいや、何も遠慮することもないからだと思う。最初は、英語を話すこと自体ためらいがあったけれど、向こうから話しかけてくれる留学生とまず触れ合って、そこからどんどん英語とかも使えるようになって、イベントにも参加して・・・徐々に自分からも話しかけられるようになったり、挨拶をするようになったりして、平気になった。初めての人でも日本人よりむしろ平気で話せる。自分の考えも言

えるようになった。今までは自分の考えを言うのが苦手。ずっと受け身だった。留学生と触れ合うようになって、自分の意見を言ったりすることが多くなった。留学生は初めて会った人とも、出身や、どうして〇〇（地名）に来たのか、将来したいことは何か、深く話せる。留学生が深く知りたがり、質問してくるから、それで、自分も意見を言うようになった。自分も表現できて心地よい。日本人と話すときにも、前よりもっと自分の意見が言えるようになった。交流室には今まで会ったことがない留学生もけっこう来ている。国もアメリカとかそういうところじゃなくて、〇〇（国名）の人がいたりして、宗教の違いをはっきり感じるようになった。宗教が違うということはわかってはいたけれど、体験したのでびっくりした。興味がわいて、もっと色々勉強したいなと思った。（クラスター1のタイトルは）**<オープンな心>**

クラスター2「積極的になる」から「様々な国の大まかな習性がわかる」までの4項目

（浮かんでくるイメージは）壁がない。文化が違うことへの興味。人の接し方の変化。色でいったら赤、自分から行動するっていうか、前進する感じ。（他には？）円が転がっている感じ。自分から進んでいく感じ。まっすぐ行くんじゃなくて、いろんなことを経験しながら進んでいく。円は転がりながらどんどん大きくなっていく。（他には？）興味とかぶるんですけど、意欲、勉強したい。（他には？）自分を成長させる。学生だからできる。例えば、仕事で外国人に関わるんだったら、自分の思ったとおりに行動はできない。今の学生の時期だったら、どんどんいろんな人と接して、いいこと、悪いこと、経験しながら、とにかくいっぱい吸収する時期。（クラスター2のタイトルは）**<成長するための土台>**

クラスター3「日本の良さの再認識」から「言葉の壁」までの5項目

（浮かんでくるイメージは）違いの大きさ。知らなければならないこと。色でいうと青。悪いことも含まれているから。（他に浮かぶことは）日本と世界。（他には？）避けては通れないこと。例えば、昔お互いの国同士が戦争をしていたり、悪いことをしていても、それを知った上で受け入れないといけない。言葉の壁も言葉が違うからと言って話すことをしなかったら、何もわかり合えない。それをどうにかして超えなければいけない。（他には？）自分を深める、教養を深める、例えば、自分が外国のことに

接するためには日本について深く知った上で受け入れようとしないと、日本のことをわからないで海外ばかりに目を向けてもいけない。（これらの項目は、）一番、難しいけど、必要なこと。違いはあって当然なこと。（他には？）実際に本や文字で読むだけではわからなくて触れ合えないと実感できないこと。文字を読むだけだと簡単に思えるけど、実際自分で経験してみると思った以上に難しいから、勉強してもっと知りたい。興味が湧いている。（思った以上に難しいっていうのは）相手の持っている世界、個人的だと思っていたけれど、国ごとで少し違う、まとまっているような気がする。あと、日本があまりに安全すぎるっていう話をよく聞く。日本人はルールとかも守るし、荷物とか教室に置いていても盗られないのが普通だと思っていたんですが、留学生は不思議って言っていたし。イベントで集合するときも留学生は30分とか遅れてくる。外国ではこれが普通なんだよと聞いて初めてわかった。最初はびっくりするけど、色々な違いも受け入れなければいけない。最初、国際交流始めたときは海外いいなとずっと思っていたけど、よく見てみたら日本でよかったな。なんだろうな（海外いいなっていうのは）例えば、いろんな人種の人がいっしょに暮らしていたり、国と国が近いからいろんな所に住む、すぐ行ける。日本人が外国人に接するみたいにお互い国が違うからとか全然壁を感じなくて、それが普通だと思えているし、留学生と接していて留学生同士がそうだと思った。自分が壁がないとつながる。（他に？）留学生と接していると、日本のいろんなことについてどうしてどうしてと聞かれるから、そこで今までは普通だと思っていたことを深く考えるようになる。外国人から見たら日本人は自分の意見を言わずにあいまいで、どうしてってよく聞かれるから。やっぱりそれも言われて初めて気づく。列を作って並ぶのも日本人のいいところだけど、言われて初めて気がつく。（他に？）留学生は、勉強熱心。見えないところで、がんばっていたり、見た感じでは、そんな風に見えないけど、実際かなり。だから刺激受けます。レポートや、日本語の勉強や、日本の難しい本を読んでいたり。一回、英語の授業のわからないところを、教えてほしいって言ったときに、英語の教科書の内容が ○○の文化についてで、訳してほしいと思ったけど、その内容に共感したらしく 自分もこういう本を読んでいるんだって日本語の難しい本について話してくれたり、刺激を受ける。（クラスター3のタイトルは）＜日本と

世界の違い>

クラスター1とクラスター2の比較

(共通点は) 心をオープンにするところ。人を知ろうとするところ。経験しながら理解していくこと。いきなりではなく徐々にできること。直接触れ合わないと絶対わからない点。自分が行動しようと思えば、そこまで難しいことではない。二つを身に付けたら、将来海外に関わらなくても日本人と関わるだけであつたとしても絶対いい。(他に?) 自分から行動しようと思えば簡単だけれども、自分から怖いとか何もしなければ絶対無理。積極的に自分から触れ合うチャンスをつかまなければいけない。深くつながりを持ちたいと思うなら、相手に求めるだけでなく、自分から心を開いていつでも受け入れられるような状態を作っておく。これが共通していること。(他に?) どっちもこうなりたいと思って(なるというより)徐々に後で、気づくこと、いつもその場で意識していることはではなくて、徐々に気づいたこと。

(違いは) 下(クラスター2:以下2)の方がやっぱり積極度が増す。上(クラスター1:以下1)の方があいまい、はっきりとはわからない。2はだいたいああ積極的になれてるってわかるけど、1はどうしてもあいまいだから、はっきり成果はわからない。1は日本人相手にも当てはまるが、2は外国人。(他に?) 2は自分がこうなりたいと思って行動しているけれど、1は別に広い心を持ちたい、そう思って行動しているわけではない。

クラスター1とクラスター3の比較

(違いは) 下(クラスター3:以下3)は国際交流する上で、まず絶対理解することが必要な一番根底部分。1は必要なわけではなく結果的にできるもの。1は対日本人についても同じ。3は、外国人相手じゃないとわからないこと。3はことばの壁とか努力次第でどうにかなる。1はただ心を開けばいい。努力とかは特には必要じゃない。3は知識的な部分で1は人間的なもの。3を克服することによって1がついてくるような感じ。色々知りたいという気持ちがあればもっとももっといける。

(共通点は) どちらとも身に付ければ、絶対将来的に役に立たないことではない。

クラスター2とクラスター3の比較

(共通点は) どっちも興味から始まる。3をどうにかしようと思って、2

の行動をする。今たくさんの時間がある学生のうちだからこそできる。どちらもどうにかしようと思ったらどうにかできる。どちらも国が違って同じようなところがあるのを認めた上でその上で、違うところがあるから、どちらも違うところを知ろうとしている。どちらも日々の積み重ね。急のぼるわけではない。

(違いは) 3はどれだけ知っても、勉強すればするほど知らないことが出てきて、完璧にわかることではない気がする。

全体について

生きていくとき絶対必要ではないが、身に付けることで、人間性が深まるっていうか。人を知ろうと思うことから始まっている気がする。

補足質問

(心がオープンになるというのは?) 隔たりなく自分の意見を素直に言える。相手も素直に受け入れられるし、自分も素直に言える。(人の良いところを見つけられるようになると、どのようにして思うようになったか?) ことばはあまりわからなくても接していると、なんだかその人をよく知ろうと思うから、ちょっとしたことでも見えてくるし、いいところとか見えてくるし。(積極的になるのは、どんなことに対してか?) 積極的に話したり、留学生と交流を持つ場に出ていったり、自分から挨拶を試みたりとか。(直接触れ合うと違うってというのは?) 本を読んだりして頭の中では宗教の違いとか勉強して理解していても、実際に体験すると少しショックじゃないけどびっくりする、たとえば、焼そばに豚肉に関係のあるものが入っていると食べられないとか。あと、留学生が積極的にすごく質問してくることも体験的に知ったこと。

3.2 JAについての総合解釈

ここでは、本人の各クラスターの解釈およびクラスター同士の比較や補足質問への答えを踏まえ、各クラスターと全体についての調査者の総合解釈を記す。

クラスター1:

J Aによるタイトルは<オープンな心>である。留学生との交流によっ

て生じた心の変化を本人が好ましいこととして積極的に評価していることがこのクラスターに現れている。各項目のイメージはすべてプラスである。

年齢や立場を気にする日本人同士の付き合い方と異なり、留学生は初めから壁を作らず個人としてJAに素直に接し、相手にも深い質問をしてくる。JAも相手との壁を感じないで、素直に自分の意見を述べることができる。素直な気持ちで様々な留学生と接していく中で、「視野が広がり」、「いろいろな人を受け入れられるようになり」、相手との「深いつながり」を持てるようになる。自分自身も「広い心を持てる」ようになり、「心がオープン」になったと感じている。「オープンな心」で人と接していると、たとえことばが十分わからなくとも「相手をよく知ろうと思うから、ちょっとしたことも見えてくるし、「良い所も見えてくる」。」と述べているように、相手とのよい関係が築かれていくことを体験的に理解していることがわかる。

こうした心の変化は、日本人と接するときにも現れ、以前より自分の意見が言えるようになったと述べている。「人と深くつながりを持ちたいと思うなら、相手に求めるだけでなく、自分から心を開いていっつでも受け入れられるような状態を作っておく」と話しているように、対人関係を築く上で心を開くことの大切さをはっきりと自覚するに至っている。このクラスターの最後に位置する「人の良い所が見られるようになった」という項目は、JAの成長や精神的な余裕を示す内容であると言えよう。

JAの変化は本人が意図したものではない。留学生との交流を重ねる中で徐々に生じたものである。しかし、対人関係形成へのよい影響がもたらされたことは、JAが留学生との交流を継続する大きな動機付けとなっており、その意味でクラスター1は、交流への動機付けを示すものであるということが出来る。

クラスター2:

このクラスターは<成長するための土台>と命名されている。留学生達と交流していく中で、異文化への興味や「好奇心」が膨らみ、勉強したいという気持ちが強く刺激されていること、いろいろなことを吸収し成長し

ていこうとする前向きで「積極的な」気持ちを持てたことが示されている。各項目のイメージはすべてプラスである。

「赤」や「前進」「自分から行動する」「円が転がりながらどんどん大きくなっていく」という本人のイメージにも示されるように、成長へのエネルギーを感じるさせるクラスターである。学生の身分である今だからこそ、自由に行動できるという思いが、積極性を加速させている印象である。

「年齢の差を感じない」関係や、「様々な国の人の大まかな習性がわかる」ようになったことを含め、留学生との「直接の関わり」を重ねる中でこそ受け取れるものがあり、それらが自らの成長を支える「土台」となっているとJAは感じている。クラスター2も交流を動機付ける要因となっている。

クラスター3:

JAによるタイトルは<日本と世界の違い>である。この命名に見られるように、このクラスターは「違い」に焦点があたっている。JAは留学生との交流により、「文化の違い」、「習慣の違い」、宗教の違い、「言葉の壁」などを否応なく感じている。違いに対し興味を感じると同時に、それら乗り越えなければいけない、避けて通れない自分への課題としても強く受けて止めていることがわかる。国際交流の根底に横たわるものとしてこのクラスターを捉えている。「青。悪いこともあるから」というクラスターの色のイメージに現れているように、5項目中3項目がマイナス、2項目がプラスで、マイナスのイメージが強い。「どれだけ知っても勉強すればするほど知らないことが出てきて、完璧にわかることはない気がする」とも述べている。

一方、互いに国が違っても人として相通じるものがあるからこそ、なおのこと違いを知り「異文化への理解」を深めたいという思いも持つ。また、違いから「日本の良さを再認識」し、投げかけられた質問から日本についても深く考えるようになる。JAは違いを乗り越え、互いの理解を深めるためには、海外ばかりに目を向けるだけでなく、日本についても深く知ることが必要であること、またそうした気持ちを持って勉強をしたり、積極的に留学生との交流を行ったりしながら日々を積み重ねていく中で、理解が徐々に進むことを実感している。

クラスター間の比較で、「3を克服すれば1がついてくるような感じ」「2も3もどうにかしようと思ったら、どうにかできる」と述べているが、違いがあっても壁を乗り越えていけば、さらに世界が広がり多くの人たちとつながり分かり合える未来があると感じていることが伺える。

クラスター3はJAにとって乗り越えていく課題を示すものと言えよう。

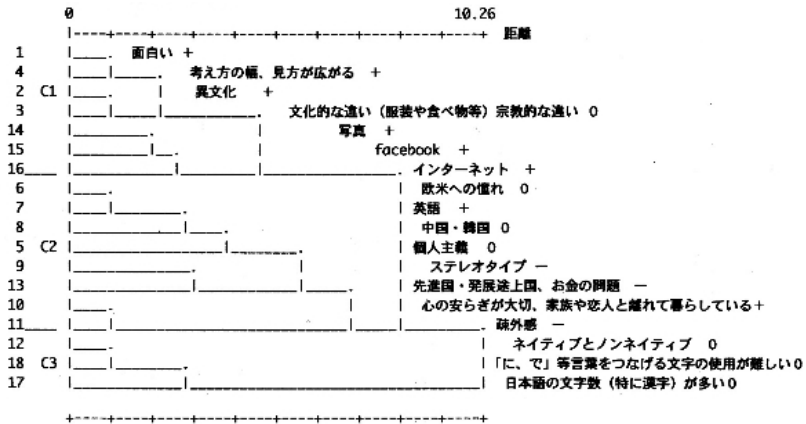
全体について：

JA自身が全体についてのイメージで述べているように、留学生との交流は「人を知りたい」という思いの延長上にあると考えられる。クラスター1の<オープンな心>の獲得は留学生との交流への動機付けを強め、交流の深まりは、クラスター2に見られる留学生への興味、異文化への興味、勉強への意欲や積極性へとつながり、それらは<成長するための土台>と位置づけられるとともに、さらなる交流を動機付ける要因となっている。一方、交流の中で感じる<日本と世界の違い>は、乗り越えるべき課題として捉えられている。しかし、克服の先には、壁のない人とのつながりを見ている。JAにとって、留学生との交流は、海外との関わりという文脈ではなく、むしろ「人間性を深める」ことと結びついていると言える。

3.3 JBによる解釈

次にJBの事例を見ていく。図2はJBのテンドログラムで、C1、C2、C3は各クラスターの範囲を示している。以下はJBによるテンドログラムの解釈である。

図2 JBのテンドログラム



クラスター1は、「面白い」から「インターネット」までの7項目である。

このグループは、自分が今一番気になり注目していること。「面白い」が頂点で、今、自分が最も実感していること。「面白い」は、ある意味本能。到達点だと言えないが、今自分の中ではクリアーに思っていること。

「考え方の幅、見方が広がる」「異文化」「文化的な違い宗教的な違い」は、全部常に自分が感じていることでそれも含めて面白いから、留学生との関わりを続けている。単純に友達ができたとかじゃなく、内面まで入って、その人たちと考え方を交換したり、自分たちが経験したことがないこと、むこうにとってもこっちの文化も同じだと思いが、その人たちの生き方、バックグラウンドに興味を持つことが、自分も相手も世界を広げることになるかなと感じるし、自分が楽しめること。ほとんどの留学生、アジア人は少ないが、「インターネット」上に「facebook」のサイトを持っていて、共通しているのは「写真」が好きなこと。日本の四季折々のもの、お正月、着物、七夕、花火、季節の花、日本にしかないもの、今しか見られないものを楽しんでいるし、求めている。それに基づいて一年過ごしているんじゃないかと感じた。イベントもそういうものをしたらいいと感じた。

「写真」の様子とか見て、そう思った。親しくなるのは何回も会った人だから日程があわなくてイベントに出られないときに、あせった。自分は英語も全然うまくないし、帰国子女の人ほどうまくないし、いっしょに授業

を受けている留学生でもない、だからもうひとつ壁があって、時々ことばも通じないことがあるし、全く同じ立場じゃない、あくまで日本人だし、支援している立場。なんかもうひとつ疎外感を感じることもある。それを克服したいと思ったとき出てきた考えが、例えば、ひとりの人と深く親しくなるとか、人と競うのをやめるとかで、それにとらわれないというのが、ほんとに一番いい国際交流なのかなと感じる。イベントについての留学生からのフィードバックは大事。主催するのは日本人だが、留学生の視点も大事。こういうこともやりたいという留学生の視点、「写真」もそう。身近にあって、気がつかないことがまだまだたくさんある。同じ立場で考える。〇〇の授業とかもいっしょにとることで同じ立場で交われる。共感できることがあっていい。（クラスター1のタイトルは）<交流して初めて気づいた大切なこと、注目していること、感じていること>

クラスター2「欧米への憧れ」から「疎外感」までの8項目

自分が国際交流をするってときに最初に（頭に）あったのが欧米の人。イベントに参加して中国人韓国人の多さに驚いた。日本人からすると顔が同じなのに言葉がうまくないという視点で見えてしまうことがあって、いい意味でも悪い意味でも同じ視点で見えてしまう。深い問題だが、欧米人には甘い。ことばがつかなくても、欧米だから英語だからしょうがないと。アジア人には厳しい。日本人と親しくなりやすい代わりに日本人が同じ目線で見ると。異文化とかを認めなかったり、そういうのって偏見につながっちゃうのかな。アジアが逆に中国韓国だけではなかったんだなって。英語は世界の共通語だって感じるが、ノンネイティブ同士の会話は大変。どっちかが、ネイティブでないとコミュニケーションは難しい。くせがあると英語はわからないので、日本語が共通語。その方が、コミュニケーションできる。英語が共通語ってわけでもない。コミュニケーションできないとそれ以上いかない。いるだけで苦痛になっちゃう部分がある。両方が理解できることが重要だと思った。ステレオタイプは、すごく反発を感じる。ステレオタイプを追いかける国の見方も問題。ある留学生は、〇〇（国名）ばいと言った人にすごく反発して、そういう人もいるけど自分はそれに入らない。一括りはやっぱりいやだって。（他には？）他の留学生からは、お金目的で来る人も少なからずいると聞いた。自分の国はまだ貧しいから、日本の一

ヶ月の奨学金は、すごく遊べるくらい高い。競争が厳しい中から来ている人達が多いので、まあまとめだけど、お金目的もあると聞くと複雑な気持ちになる。それから、世界から見て、政府どうでしょうと思われる（批判されている）国もあるから、話しているときタブーがあって、そういうのを知っていなければいけない。あと、豚肉を食べない、お酒も飲まない、そういうところに誤って連れて行ったりすると絶対いやだって。譲れないところが絶対あると思うので知っていることはすごく重要だと感じる。最後に「心の安らぎが大切」というのがあって、実際健康診断のときに、メンタルの欄を真剣につけていた。落ち着かないとかに○がついていた。大丈夫かなと感じて、なにか心配なことがあったらメールしてということがあった。でも馴染んできて顔つきが違ってきた。初めは緊張して固まっていた。母語をしゃべれない環境だし。言わないけど、寂しいっていうのもあるだろうし、ひとりだなんて感じるだろう。だからそういうときに、聞いてもらえる交流室は、大事。そこでしょっちゅう会っていると仲良くなる。話していると不安があることわかるし、自分の表現できる場所があれば、存在価値を認めてもらう場所があると、そこで多少なりとも手伝いできれば、自分が勉強していく上での気持ちの支えにもなるし、場所ってけっこう大事だな。そのあと親しくなれば、さらにやってあげればいいし、それはすごく感じて、こういうことずっとやっていけばいいな。（疎外感って？）留学生がいても気にしないで日本語をしゃべる人もいるが、自分は気にする方。たとえば、英語スピーカーがいて、自分がそのときしゃべれない悲しさわかった、何回かそういう場面に出くわして、向こうは全然そういう意識ないけど、入れない孤独感、感じて。しゃべっても通訳するとか、でも通訳するとばかにされている、理解できてないと思わせるのもいけないので、ちょっとずつしゃべったり、それはもうほんとに個人の気持ち次第。孤立させるのはいやだ。ことばができないっていうのは、自分の意見が言えないってこと、それは口を閉ざされているってことで、そういうのは絶対いやだ。ことば、特にレベルが違うとき、配慮していると意見も言ってくれるし、日本語を勉強しているから、チャンスがあれば一言でも日本語を使おうとしているから、日本語で話すときは（ネイティブとして余裕があるから）必ず目を配ることはやっていきたい。ほんとは他の人にもやってほしい。（どういうまとめ方？）「心の安らぎ」は違

うけど、他は一般に言われていること、ステレオタイプなこと。国際交流は英語が必要だとか。国際交流をする前に一般に言われているから、自分でも思っていたイメージ。英語を話す人は多いし、自分の中にも確実にあること。ここ（一般的に言われていることと現実の違い）が、自分が一番発見したこと。まだ、とらわれているところもあるかもしれない。個人主義は感じる。写真もひとりでどんどん撮るし、みんな合わせることは好きじゃない。〇〇（プログラム名）の学生は、イベントでも個人が好きなことに参加する。いつもいっしょに話してる人同士でも（あわせない）。日本人と違うな。いっしょに群れておけというのとは。（クラスター2のタイトルは）＜国際交流する前に抱いたイメージ、（多分一般の人も考えているだろうと推測されるイメージ）＞

クラスター3「ネイティブとノンネイティブ」から「日本語の文字数（特に漢字）が多い」までの3項目

留学生に、最近日本人っぽくしゃべりたいと言われた。留学生の日本語が丁寧だというのに食わない。たとえば、「ね」で滑らかになることを話したら、早速つけてきた。行くねとか。教えてあげると進んで使う。気づいた範囲で言うと、だんだん日本人ぽくなってきた。（もらったメールについて）日本人が書いたと思ったと言ったら、すごく喜んだ。つなぐことば（助詞のこと）を難しがっている。友達に会う、友達と会う。留学生特有の日本語もある。「漢字は文字が多い」のが大変。でも留学生は、漢字が書けると優越感を感じている。coolと思っている。（クラスター3のタイトルは）＜日本語の難しさ＞

クラスター1とクラスター2の比較

（共通点は）国同士とか文化同士の違いについての内容。最後のは、日本語にフォーカス。思い込みとかが中心なところとか似ている。最終的には、個人の特徴が、人がどういう人であるかが基準になっているところ。

（違いは）2は交流グループに入らなくても思うこと。1は交流グループでかかわったから実感できること。（他に？）国際交流していく上で、2しか関心がなければ、続いて行かない。1の内容に気づくと、さらに広がる余地がある。1は自分が得た主観的な考え、2は客観的なところが強い

(他に?) 2は暗い感じで、自分が国際交流に対して抱いている、ダークなイメージ、避けて通れないことだが、スムーズな交流を阻むもの、障害になってしまうものとか。1は注目したいことだし、明るい方向の部分を見ているのかな、今、それが目につくってことは。

クラスター1とクラスター3の比較

(違いは) 3はことばに特化した内容。1は異文化全体に関する内容。そんなようなものが全然違う。1は実感してわかること、3は留学生に聞いてわかったこと。聞いたことがメイン、実際はどうかわからないけど、言われて気づいたこと。言われて気づかされたもの。日本語のわずらわしさも、来ている留学生はそれに関心がある人。一般的に日本語は世界の中でメジャーだと思わない。(その意味で、日本語に関心のある留学生は)その国の一部で、代表ではない。その意識大事かなと思う。

クラスター2とクラスター3の比較

(違いは) 2は主に日本人が留学生や外国人に対して思っていること。3は留学生が思っていること。2は一般、(1はJB)。主役が、みんな違う、今見ると。

その他

留学生との交流は相手に分からないミステリアスなところがあるから面白い。

3.4 JBについての総合解釈

クラスター1:

JBによるタイトルは<交流して初めて気づいた大切なこと、注目していること、感じていること>である。このクラスターではJBが留学生との交流を重ねて行く中で、現時点において到達した交流に関わる注目事項が示されている。タイトルにあるように、交流を初めたからこそ気づいたJBにとって大切なことであり、JBが現在、これらを心から「面白く」、楽しく捉えていることがわかる。留学生達の日本を楽しむ姿勢も刺激となってい

る。これらの気づきが動機付けとなり、自らも楽しく、留学生達も楽しめる支援や交流をさらに進めていこうとしていることが語られている。そして、留学生との交流は、表面的なつきあいではなく、内面的な意味で互いの世界を広げることになると実感している。留学生との関わりの中で、壁や「疎外感」を感じる部分があっても、それにとらわれず、自分なりの方法、例えば「ひとりの人と仲良くなる」「人と競わない」など、気持ちをすぐに切り替え、前向きに行く姿が伺われる。

ここでは、双方の「違い」（際立った違いではなく、ちょっとした違い）がお互いを知る手がかりであり、ツールであり、互いの関係構築にとっての最大の材料になっているように見える。このクラスターは、交流の原動力を示していると言えよう。各項目の単独のイメージは7項目中6項目がプラスであるが、「文化的な違い、宗教的な違い」がどちらとも言えないことを示すゼロとなっている。違いが常に楽しむだけのものではないという認識が、態度を保留にした、この評定に反映されていると言える。

クラスター2:

JBがつけたタイトルは、<国際交流をする前に抱いたイメージ。（多分一般の人も考えているだろうと推測されるイメージ）>である。クラスター1との比較で、本人が「スムーズな国際交流を阻むもの」「暗い」としても見ていることわかるように、国際交流に際して問題となること、言い換えればJBを感じる「課題」が示されているのが、このクラスターである。しかし、このクラスターは単に「課題」を示すだけでなく、その背後に国際交流を通してのJBの学びがあり、JBの変化、成長の過程を現すものである。8項目中、プラスは2項目のみで、マイナスが3項目、どちらとも言えないことを示すゼロが3項目である。

JBは実際の交流を通じて、一般的に言われている国際交流のイメージが必ずしも現実とは一致せず、偏ったものであることに気づいている。しかし違っているとも言い切れない。自分の中にもまだ残存するイメージでもあり、JB自身イメージを払拭できたものがある一方、答えが出せないものやイメージや偏見などを克服できていない部分もある。

イメージが払拭できた事柄としては、「国際交流の対象と言えば「欧米

人」というイメージは、実際には当てはまらず、大学にはむしろ「中国人、韓国人」が大勢いること、「アジアが「中国韓国」だけではないこと」、「英語」が国際交流の場における共通語とは限らないこと、「個々の留学生が出身国の「ステレオタイプ」とは必ずしも一致しないこと」などがある。ステレオタイプでとらえる傾向については、十分批判的な視点も獲得されていることが本人の話からも分かる。

克服ができない部分としては、「アジアの人々は外見が日本人と似ているがゆえに、異文化を異文化として認めずに、日本人と同じものを求めたりする傾向で、日本語も不完全さに目が行ってしまう」、「欧米人に甘く、アジア人に厳しい傾向」などがあげられている。JBの捉える国際交流に関する一般的なイメージが、まだはっきりとは判定できない課題として、クラスター2に入ってきたと言える（注5）。

さらに、ここには実際の交流からJBが感じたあらたな課題「先進国・発展途上国、お金の問題」「心の安らぎ（の確保）」「疎外感」が項目にあがっている。交流の中で留学生が抱える別の側面、たとえば高額な奨学金を得ること自体が目的で来る留学生がいること、留学生出身国政府への世界的な非難、また宗教にまつわるタブーなどの事柄も直接留学生と接触した結果、関心が払われるようになったことが本人の解釈からわかる。JBは留学生の「心の安らぎ」に貢献するものとして交流室の存在意義を強く感じており、自身も個人として同時にグループの一員として留学生の心の安定に貢献したいと考えていることが示されている。また、交流の際に相手に「疎外感」を与えないことは、逆の立場に身をおいた経験から、特に意識していることであるという。

クラスター2は実際の交流を通してJBがあらためて知ったことで、交流のやりがいにもつながっていると思われる。ただ、JBが現在活動を続ける原動力となっているのは、クラスター2に示された学びや「課題」よりむしろクラスター1に示された「面白さ」であると言える。

クラスター3:

JBによるタイトルは<日本語の難しさ>である。3項目のイメージはすべてプラスでもマイナスでもないゼロとなっている。日本語の難しさを、留学生に言われて気がついたとJAは述べている。留学生との関わりの中

では、日本語も主要なトピックのひとつであり主要なサポートの対象である。日本語の「ネイティブ」であるJBには見えないものが「ノンネイティブ」の留学生には見えている。外国語として日本語を見ることは、日本人学生にとっても日頃何気なく使っている日本語を客観的に見る機会となる。母語としてこれまで特に注目することのなかった日本語に対し現在関心が注がれていることを、このクラスターは示していると言えるが、日本語に対する直接の関心というよりも、留学生との交流のツールとして関心が払われているようにも思われる。

全体について：

3つのクラスターとも、留学生との交流に際し、JBが日常意識していることである。しかし、目を向けたいのは、クラスター1にある面白さで、これが交流への原動力となっている。クラスター2もJBの意識下でありその評価は定まっていないが、クラスター全体としてはスムーズな交流を阻む要因で、克服すべき課題として位置づけられている。クラスター3の位置づけは明確ではないが、留学生の視点に立つとイメージされる事柄ということになる。

4. 総合的考察

JA、JB2名の分析の中で、特徴的と思われる点、共通点、相違点について考察していく。

JAの分析からはまず、クラスター1<オープンな心>に示されたように留学生との交流がJAの対人関係形成に大きく影響を与えていることがわかった。坪井（1999）は、留学生との交流には日本人同士の間の暗黙のルールに縛られずにすむという利点があることを指摘している。JAは、相手との壁を感じさせない留学生の率直さに徐々に自分の心が開かれ、素直に意見が言えるようになり、対人関係も深まったとしている。これは時間をかけて少しずつ親しくなっていく日本人同士の関係形成の過程とは異なっている。しかし、留学生との交流を深める中で、日本人との交流においても、ずっと受け身であった自分が、意見が言えるように変化したと述べている。そして、人と深くつながりを持つためには、相手に求めるだけでなく、自

分が心を開くことの重要性を認識するに至っている。留学生との「対人関係の深まり」は、JAの中で、クラスター2<成長するための土台>、クラスター3<日本と世界の違い>に見られるような、交流への意欲や異文化理解への意欲、積極的な行動、勉強への意欲へと広がっている。さらに、自分自身が人間として深まり、成長していけることへの期待感へもつながっている。

クラスター1<オープンな心>は、交流を始める際に目標としたり期待したことなく、交流を続けるうちに少しずつ現れた変化であったとしている。しかし、この変化が、JAをあらたな広い世界へと導き、自らを成長させる鍵にもなっていることがわかる。JAは、「自分から行動しようと思えば簡単だけれども、自分から怖いとか何もしなければ絶対無理」と語っている。このことは心理的な最初のハードルを超える勇氣だけは必要であること、視点を変えれば、最初のハードルが低ければ留学生との交流は難しいものではないことを示唆している。JAにとっては、留学生との交流は、人間への興味の延長にあり、人に対する探究心が、交流を継続させる動機付けになっていると言えよう。

JBにおいては、留学生と日本人との「違い」の面白さが、交流への意欲、原動力となっており、交流を心から楽しんでいることがわかる。異文化接触における心理的变化を示す「文化変容カーブ」のハネムーン期（何に対しても新鮮な興味が持てる時期）を思い起こさせる（注6）。ホフステード（2007）は、異国の訪問者を迎えたとき、このハネムーン期と似た第一の段階があるとしている。その次に自民族中心主義の傾向が強い第二段階があり、ここでは自分たちの物差しで訪問者を評価しようとするが、次第に多元主義の段階に移行するとしている。多元主義の段階では、異文化にはその文化独自の評価基準があり、異文化からの訪問者を彼らの物差しに照らして理解しようとするとしている。

このモデルに照らすと、JBのクラスター1<交流して初めて気づいた大切なこと、注目していること、感じていること>は第一段階、クラスター2<国際交流をする前に抱いたイメージ。（多分一般の人も考えているだろうと推測されるイメージ）>は第二段階から第三段階への移行期と見ることができると言える。クラスター3<日本語の難しさ>は、留学生の視点で日本語を見るという意味においては、第三段階となる。

JAでは、クラスター1<オープンな心>と2<成長のための土台>が第一段階で、クラスター3<日本と世界の違い>が第二から第三への移行期となろう。しかし、同時に3つの段階が見られることからわかるように、このモデルを単純に学生達に当てはめることはできない。実際の交流では、相手の文化がひとまとまりで認知されるのではなく、言語、習慣、態度、考え方など様々な事柄において受容の程度、段階が異なり、また多様な留学生との交流があれば、相手によっても受容の程度が異なるということが考えられるからである。実際、JBは同じ事柄でも欧米の学生とアジアの学生に対する受容度が違うことを述べている(注7)。また、相手との相互作用により評価基準である物差し自体が変化することも考えなければならない。しかしながら、このモデルに示されるハネムーン期のような心理状態が国際交流の動機付けのひとつとなっていることは確かであろう。

クラスターの構成を見ると、JA、JBの両方とも、交流への「動機付けを示すクラスター」と交流における「課題を示すクラスター」が形成されていることがわかる。動機付けを示すクラスター(JA<オープンな心><成長するための土台>、JB<国際交流を初めて気づいた大切なこと、注目していること、感じていること>)は、プラスの項目で構成されイメージも明るい。一方、課題を示すクラスター(JA<日本と世界の違い>、JB<国際交流をする前に抱いたイメージ>)にはマイナスや0が含まれイメージも暗くなる。しかし、課題のクラスターは必ずしも交流を阻むものではない。JAでは違いを乗り越えるため、相手文化に対する知識を高め、理解することが課題である。JBでは、誤解や偏見を克服すること、ステレオタイプの排除、異文化における孤独や疎外感をサポートしていくことを課題として見ている。これらの課題は、この2名の学生にとって交流を通じての学びや成長を促す役割を果たしている。国際交流活動を行う学生達にとっては両方の要素とも重要だと思われる。PAC分析でクラスター化されたことで、この二つの要素とその内容、イメージを明らかにできたと言える。

JA JBとの比較で見ると、JBがグループの一員としての留学生との交流を意識しているのに対して、JAは個人的な関係で交流を捉えている点に違いが見られる。これに関連して、JBでは「留学生の視点」が、イベントの企画やサポートなどの行動へと結びつけられているが、JAの中では個人的

な学びにとどまっている。グループに所属している期間がJBの方が長く、その影響があると考えられる。

その他両者に共通して述べられているのは、以下のような点である。実際に留学生と交流して初めてわかることがある。「留学生」が目の前にいることで、異文化への興味、理解が生まれている。留学生と深いつながりを築ける。留学生とのつきあいでは彼らのバックグラウンドに興味を持つ。留学生を通じて、実際に異文化を経験することは単なる知識とは違う価値がある。また、両者とも日々の積み重ねの中で、交流が深まっていくことを指摘している点が共通している。

5. おわりに

本稿では、国際交流グループに所属し1年目の2名の日本人学生が留学生との交流活動をどのように受け止め、またどのような影響を受けているかをPAC分析を用いて探った。両者に共通したクラスターの形成（動機付けのクラスターと課題のクラスター）が見られるとともに、個々に特徴的な態度構造を捉えるができた。この2名は留学生との交流の期間がまだ浅く、接触を持つ留学生の範囲もまだ広いとは言えない。2名とは異なる態度構造を見せる日本人学生もいるに違いない。ある学生にはプラスに作用した事柄がマイナスに作用する可能性もある。また、時間の経過による変化も生ずると思われる。今後は事例を増やし、留学生との交流が個々の学生に与える影響をさらに探っていきたい。

注

1. 横田・白玉（2004）では、留学生交流研究の研究目的がどこにあるかについて、次の3つの項目により整理している。1つ目は、異文化間的情況を把握しようとする研究、2つ目は、異文化間的情況のメカニズムを解明する研究、3つ目は、異文化間的情況の中での問題の解決方法や予防の手段を探る研究である。日本においては、現状把握の次にメカニズムの解明を飛ばして解決や対処を探る実践的な研究が行なわれ、メカニズムの解明が不十分であると指摘している。

2. 活動の開始時期は学生によって異なる。ここで示す「1 年目」などの期間は学年を示すものではない。
3. 被調査者による解釈は録音した発言をもとに文字に起こしたものであるが、性別を含め、個人の特定につながる可能性のある部分や私的な事柄に関する部分などは修正あるいは削除して記載した。また、言い直し、言いよどみ、繰り返し、文末表現などは省略したものがある。調査者の発言は簡略し（ ）に記した。
4. PAC 分析では、析出されたクラスターから、辞書的な解釈ではなく、さらに思い浮かぶイメージを被調査者から引き出す事が大切である。被調査者はイメージを追うことで、内面深くを探索することができる（内藤他 2008）。どんな「色」が思い浮かぶかを尋ねることは、それに連なるイメージを引き出すことにつながるので有効であると言える。
5. 「英語」は単独のイメージではプラスであるが、この文脈では国際交流イコール英語で話すことではないという解釈となろう。また、英語に関連して、JB は non-native の英語に触れ、コミュニケーションの成立のしやすさ、しにくさを自分なりに体験を通して検証している様子が伺える。
6. 文化変容カーブについては、横田・白玉（2004）、ホフステード（2007）に紹介がある。
7. 高井（2006）では、Adler(1975)の異文化体験モデル（異文化適応モデル）が紹介されているが、適応は「認知」「感情」「行動」の各側面で行われると説明している。異文化に接触した者がどの段階にいるのかは、各側面から見るが必要となる。

参考文献

- 岩井朝乃（2006）「日本人大学生の「文化的他者」認識の変容過程—多文化クラスでの異文化接触体験から—」『異文化間教育』23号109-124
- 瀬口郁子・田中圭子（1999）「チューター制度の運用に関する提言—満足度と教育的効果の観点からの一考察」『神戸大学留学生センター紀要』6号1-17
- 高井次郎（2006）「異文化接触に伴う心理」『講座・日本語教育学第5巻 多文化間の教育と近接領域』82-94
- 田中共子（1995a）「日本人チューター学生の異文化接触体験：ソーシャル・サポートとソーシャル・スキルおよび自己成長を中心に」『広島大学留学生センター紀要』6号85-101
- 田中共子（2000）『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版
- 坪井健（1999）「留学生と日本人学生の交流教育—オーストラリアとの比較を通して—」『異文化間教育』13号60-74
- 内藤哲雄（2004）『PAC分析実施法入門 [改訂版]』ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸太一編（2008）『PAC分析研究・実践編1』ナカニシヤ出版
- 花見慎子（2006）『大学生と国際交流—四人のライフ・ストーリー』ナカニシヤ出版
- ホフステード（2007）岩井紀子・岩井八郎訳『多文化世界』有斐閣
- 山崎けい子（2002）「チューター活動における日本人学生の意識変化」『富山大学人文学部紀要』36号101-114
- 横田雅広（1991）「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』15号81-97
- 横田雅広（1996）「留学生教育交流と異文化間教育学」『異文化間教育』10号44-58
- 横田雅広・白土悟（2004）『留学生アドバイジング』ナカニシヤ出版

参考資料

析出されるクラスターの項目が統計ソフトによって異なる場合がある。参考資料として各項目間の類似度評定の結果（距離対比表）を記入した表を以下に記載した。編みかけの数字は各項目の重要度順位である。

参考資料（以下はJA、JB重要度順に並べた各項目の類似度判定結果を示したものである）

JA重要度順位による距離対比表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1	0														
2	1	0													
3	2	5	0												
4	1	1	5	0											
5	1	1	5	2	0										
6	3	1	2	4	5	0									
7	1	1	5	1	1	1	0								
8	4	2	2	5	4	1	4	0							
9	2	1	5	1	1	4	1	5	0						
10	4	5	5	4	3	2	2	5	4	0					
11	5	2	1	5	5	1	4	1	5	6	0				
12	2	2	5	2	1	4	1	5	5	3	7	0			
13	5	5	4	5	3	2	2	2	1	1	4	4	0		
14	4	4	5	5	5	1	5	1	6	6	1	7	6	0	
15	3	5	5	4	5	1	5	1	6	7	2	2	1	3	0

JB重要度順位による距離対比表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1	0																	
2	2	0																
3	2	1	0															
4	1	1	2	0														
5	3	3	4	4	0													
6	5	2	4	4	4	0												
7	5	2	4	3	2	1	0											
8	5	5	4	4	4	2	3	0										
9	6	3	3	3	5	3	4	3	0									
10	4	3	4	4	6	4	6	5	6	0								
11	6	3	4	5	3	3	2	6	6	1	0							
12	4	4	6	3	5	4	4	4	4	6	2	0						
13	7	3	4	4	4	3	6	5	3	3	4	6	0					
14	4	3	3	3	5	3	4	6	5	4	6	6	6	0				
15	4	3	3	3	5	3	2	6	5	4	6	6	6	2	0			
16	3	3	2	2	3	4	2	3	6	4	7	4	4	3	2	0		
17	3	5	6	4	6	7	6	3	7	7	6	3	7	7	5	6	0	
18	3	5	6	3	6	7	6	5	7	7	6	1	7	7	5	6	2	0

The influence of the interaction with international students

–Case studies of two Japanese students who belong to an international exchange group–

FUJII Keiko

Key words: PAC analysis, international exchange group, interaction with international students, Japanese students, cross cultural understanding

This paper analyzes the cases of two students JA and JB, who belong to an international exchange group, focusing on the influence of the interaction with international students (IS) and the activities of the group. This study is based on PAC analysis. In case of JA, the following things are to be found. Interaction with IS opens JA's mind gradually because they are much more frank than Japanese students. JA can make deep relationships with IS and JA is getting more interested in their cultures. However, cultural differences sometimes seem difficult to accept for JA. JA would like to deal with it by studying and knowing the culture more. In case of JB, the following are findings. JB is enjoying leaning about the cultural differences among various countries and places. They are the most interesting topics to talk about and get to know each other for JB. After entering the group, JB found that there was a gap between the image of international exchange and the reality. JB wants to correct the wrong stereotypes but they persist. JB also realizes there are several things to be careful of when interacting with IS. For example, religious matters and political matters. Analyzing the cases of the two students, two factors were found that lead the students to continue their activities. One factor motivates them and the other leads them consider some international differences, of which a few are negative.